

視 察 報 告 書

日本共産党 小田桐たかし
徳増 きよ子
植 田 和 子

◆ 2016年8月9日 流山市立中野久木保育所、平和台保育所、向小金保育所

●目的

施設や備品の老朽化の確認と、待機児が昨年の2, 8倍となっている現状の下で、定員割れとなっている公立保育所の課題を把握すること。また、現場の声をお聞きし、市政運営に生かすため、視察した。

●所感

昭和40年代に建設された各保育園だけに、施設の痛みに対する計画的な修繕及び改修が課題になっていると考える。トイレにおける扇風機設置（保育士が何人も順番にトイレ訓練等を行うため）や水道の蛇口を子供でも開けやすいようにするための工具設置、ガラスから透明アクリル板への変更、ガラスへの飛散防止フィルムの設置、階段手摺の改善（幼児の手のひらサイズや高さに合わせる）、など現場からの要望に順次応える取り組みは確認できた。

しかし、雨漏れ跡や内装の経年劣化、内外壁のヒビ…様々な傷みが見られた。各施設の大規模修繕がどう位置づけられているのか等、不明な点も多く、現場との意思疎通・下期計画の浸透が課題に感じた。また向小金保育所の外壁塗装を含めた大規模修繕を今年度実施されるが、その傷み具合から枠配当予算内で課目計上が優先されているのではないかと考える。

この背景には、日常の業務からおもちゃや備品の交換は目につきやすく要望しやすい反面、施設の老朽化・内外装等は予算がかかることから次年度以降に先送りしがちな現場サイドの課題もあると思われるが、現場を十分に経験した保育士が以前のように課長補佐などの処遇に就けなくなっている現時点では、この溝を埋める仕組みに知恵を絞る必要があると思われる。

市民が「預けたい」と思える公立保育所にするには、工期中の保育提供・待機児解消への考慮とともに、内外装を含めた大規模改修を計画的に進めることが欠かせないと考える。

定員割れの背景については、重い障がい児（プラダーウィリー症候群や異染性白質ジストロフィー等）を受け入れている現状や、その他にもつばさ学園との統合保育、並行保育（保育園に預けながらつばさ学園でのリハビリ等を受ける）、デイつばさ・保育所の複合利用など様々で個々のレアケースに対応せざるを得ない状況から、定員

割れ＝ダメという扱いはすべきではないと考える。さらに、正規保育士以外に、任期付き保育士（任期中だけ正規扱い）、非正規の常勤保育士（有資格）、時差出勤保育士（有資格）、指定休対応保育士（有資格）、延長保育従事者（資格の有無を問わない）と大変複雑化しており、十分考慮すべき内容があると把握できた。

この解決には、学生の希望が多い正規保育士の雇用拡大の優先性を改めて深く認識するとともに、複雑な処遇の中での体制維持は大変苦勞されているのではないかと考える。また、10年以上前から、障がい児の保護者の要望が提出されている『市内複数カ所での統合保育の実施』に向けた具体化を次期総合計画に位置付けるべきと考える。

また、早番（7～8時半）、遅番（17時以降）の保育時間は、延長保育従事者（非正規・無資格者含む）だけで『保育』を回していることについては、現場の意見も含め、今後どうあるべきかを以下の項目（①無資格者が多い従事者で『保育』が提供できているのか、②延長時間に提供している『保育』とはどういうものか、8時半～17時までの『保育』と相違点は何か、③災害時の対応はどうなっているのか等）で議論すべき課題と思われる。

また、中野久木保育所の卒園児で11小学校、平和台保育所の卒園児で10小学校と広範囲から通園している一方で、保育ステーション利用者が割合として少ないことは、今後さらに研究を深めたいと思われた。

最後に、今本市における保育行政の中で、『保育園を作っても作っても待機児が減らない』という課題について、改めて計画的な街づくりの重要性を視察を通じて感じた。

ミニ開発が虫食いの的に始まった向小金地域において、園庭を広々と確保した保育所を設置したことはかけがえのない取り組みであったし、地権者と行政との関係性の深さを感じた。また、区画整理における公園と隣接させた平和台保育所は、園庭が狭くても園児の外遊びが確保され、日照も十分確保されていることは、当時の都市計画や保育課の先見性や部・課を超えた熟議の深さを示している。これらの経験から言えば、①TX沿線に保育園用地を確保しなかったこと、②それらを認識せず、夫婦共働きの子育て世代＝保育園及び学童が必須世帯に特化した誘致戦略をとったこと、③待機児が増大しても、市長の優先政策のため、誘致宣伝を中止できないことなどの課題に向き合う必要があると思われる。それ以外に、①増え続ける待機児や既存公立保育所の大規模改修期間中での保育確保を検討せず、公立2園を廃止するとともに、②正規保育士にも退職者不補充を当てはめ、非正規雇用で現場のやりくりにあたってきたことなどにも目を向ける必要性を感じた。